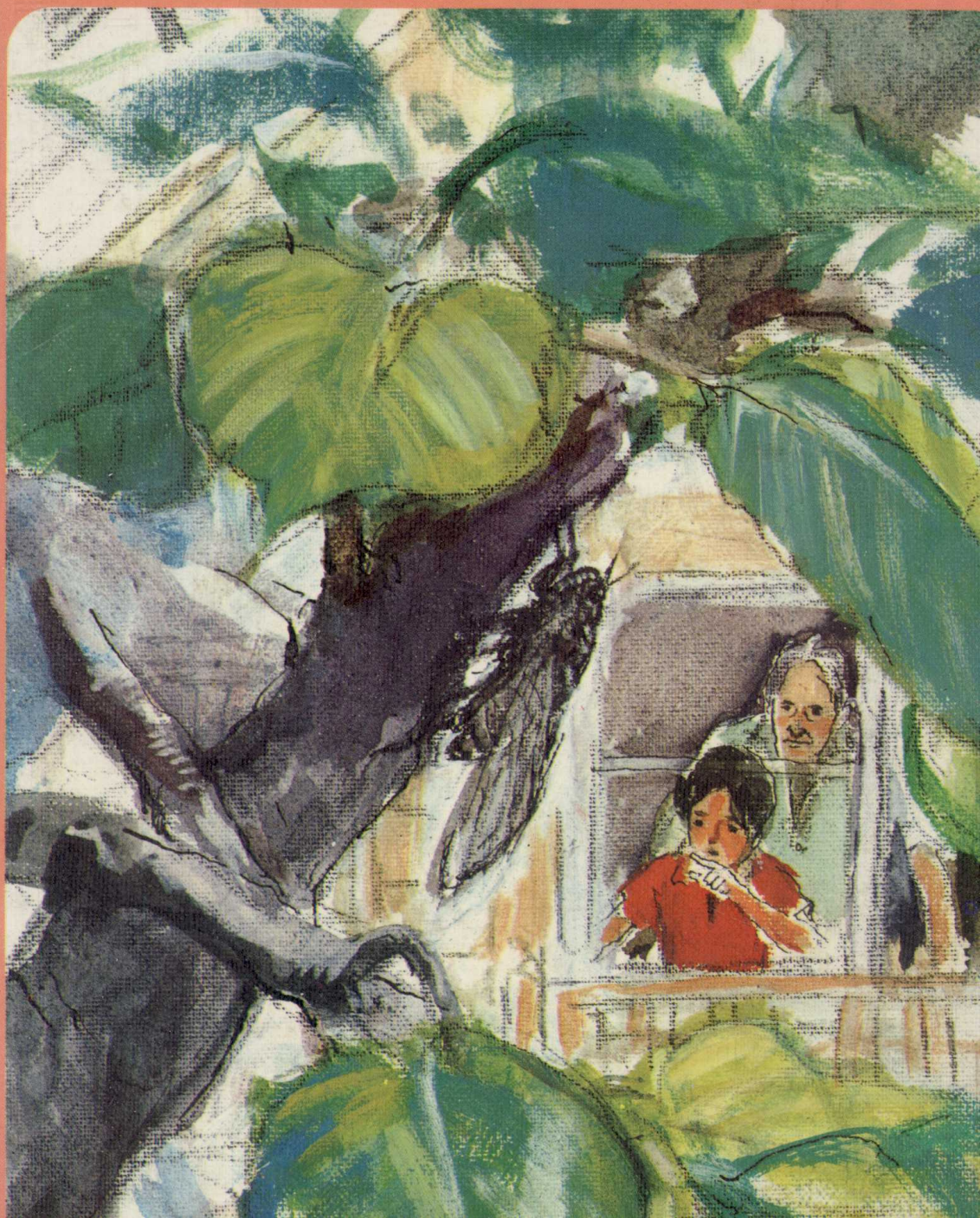


詩集 小さなぼくの家

野長瀬正夫 絵 武部本一郎



詩集 小さなぼくの家

野長瀬正夫 絵 武部本一郎



911

野長瀬正夫

詩集・小さなぼくの家

講談社 1976

102p . 22cm (児童文学創作シリーズ)

のながせまさお

詩集・小さなぼくの家

昭和51年2月16日 第1刷発行

昭和51年 第2刷(E)

作 者 のながせまさお 野長瀬正夫

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号 112

電話 東京03(945)1111 (大代表)

振替 東京8-3930

製 版 株式会社 まゆら美研

印刷所 豊国オフセット株式会社
双美印刷株式会社

製本所 大製株式会社

© 野長瀬正夫 1976 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

定価は箱に表示してあります (児一)

もくじ



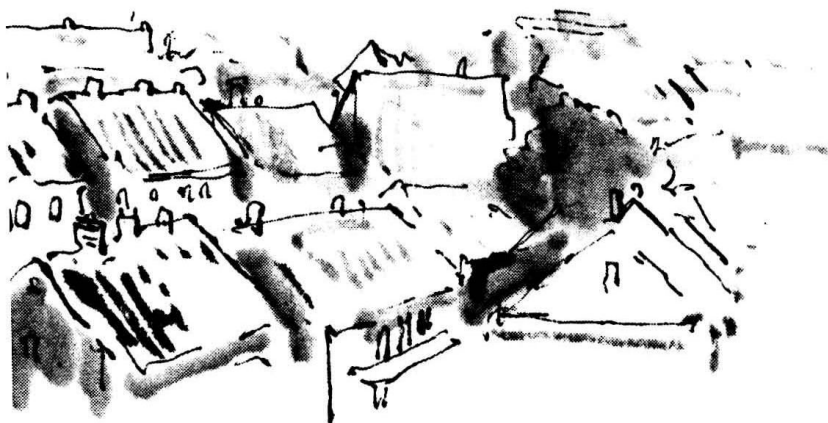
10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
あわれ論争	夏の終わり	わが家の昆虫記	小さい姉さん	大きい姉さん	山のふるさと	わが家の家族	ぼくの家	お母さん	ろうがんきよう
32	30	26	24	21	17	14	12	10	8



20	お父 ^{とう} さんと遊 ^{あそ} ぶ	62
19	お母 ^{かあ} さんはいそがしや	58
18	花 ^{はな} とお母 ^{かあ} さん	54
17	朝 ^{あさ} のためいき	52
16	お父 ^{とう} さんの出 ^{しゅつ} 張 ^{ちやう} 報 ^{ほう} 告 ^{こく}	48
15	ぼくは末 ^{すえ} っ子 ^こ	46
14	一 ^{ひとり} 人 ^り になつて	44
13	姉 ^{ねえ} さん、ありがとう	42
12	お母 ^{かあ} さんはふるさと	38
11	ある日 ^ひ の電 ^{でん} 話 ^わ	35



21	二つの齒車 ^{はぐるま}	64
22	ある日、ある時 ^{ひとき}	68
23	夫人 ^{ふじん} とかみさん	70
24	千葉 ^{ちね} のおばちゃん	74
25	お父 ^{ちち} さんの足音 ^{あしおと}	78
26	夕空 ^{ゆうぞら} とお父 ^{ちち} さん	80
27	つりをするお父 ^{ちち} さん	82
28	かけ出 ^だ したお父 ^{ちち} さん	84
29	ぼくとお父 ^{ちち} さん	86
30	たった一人 ^{ひとり} の男 ^{おとこ} の子だから	88



31 子と走る

—— タケシにおくる父の詩 ——

94

あとがき

解説

与田準一

100 98



詩集・小さなぼくの家



ろうがんきよう

ある日、

新聞を讀んでいるお父さんを見て

ぼくは「あつ」と声を出しそうになった

どうしたの、お父さん、そのめがね？

うん、これか、とお父さんは顔をあげた

ろうがんきようだよ。

ろうがんきようって、なにさ？

国語辞典でしらべてみなさい、ふふふ……。

ちよつと意味ありげなわらい方だった

めがねをかけたお父さんなんて初めてだ
 ぼくはさっそく国語辞典の

「ろ」のページをひらいてみた

あった、老眼鏡、その下に

年をとってなになに——と説明してある

そうか、お父さんが

自分からいいなくなかった気持ち、

ぼくにも やっとわかった

お父さんのうしろすがた、

よく見ると 頭のとっぺんの毛が

すこうし うすくなっている

でも、それはいわないでおくことにした。



お母さん

お母さんが

アイロンかけをしている

お母さんのかみの毛も

しらがが だいぶんふえてきた

一本か二本 ではじめたころは

タケシ、ぬいて——といったものだが

もう防ぎきれないと かねんしたのだろう

このごろは なにもいわなくなった

ぼくも しらん顔をしている。



ぼくの家

駅前の商店街を通りぬけ

ゆるい坂道をのぼっていくと

高さ十メートルもある一本のミズキが

道路の上に えだをしげらせている

それが ぼくの家が目じるしだ

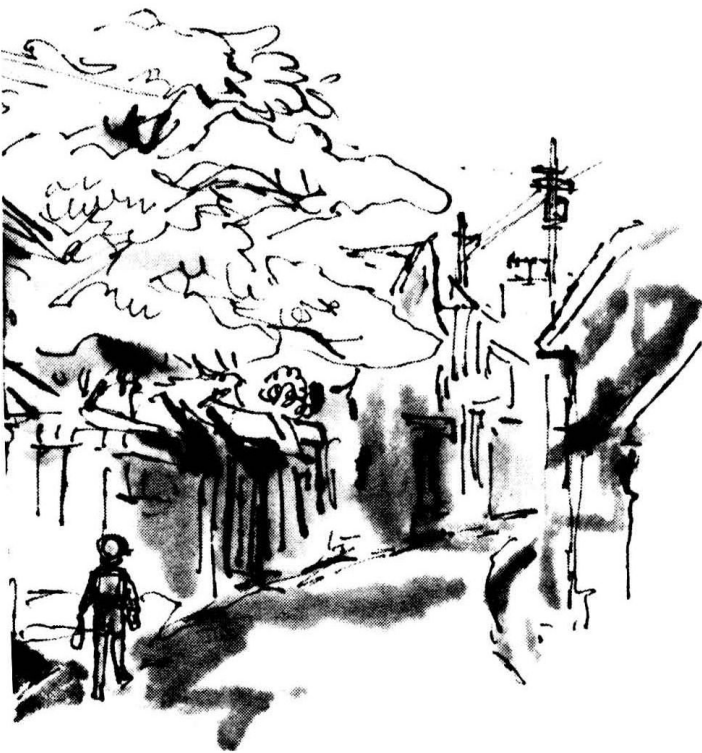
小さな庭にはふつりあいな この大木、

ぼくの姉さんたちが幼稚園のころ

お母さんと 清瀬の雑木林から

三十センチぐらいの芽ばえをぬいてきて

うちの庭に植えたのだという



ぼくがまだ生まれてないじぶんの話だ

その雑木林は

まもなく切りはらわれて宅地に造成され

清瀬町は いまの清瀬市に発展した

姉さんたちが引きぬいてこなかったら

このミズキも とつくのむかしにかりとられて

こんな大きく育たなかったはずである

「人に歴史あり」というテレビ番組があるが

木にもまた歴史あり、だ。



わが家の家族

ぼくには二人の姉がいるが

二人ともおよめにいったので

今は家にいない

ぼくの家は すこし変わっている

映画やドラマでは むすめがおよめにいくとき

かならず親がなくものだが

ぼくの家のお父さんとお母さんは

なみだなんか一てきも出さなかった

式のあった日、お父さんは

おむこさんとかたを組んで

